

# REHACARE2025 視察レポート

昨年、保健福祉広報協会では、「H.C.R.スタディツアー」を実施し、デンマーク・ドイツの高齢者施設の訪問とREHACAREの視察を行いました。本稿では、ツアーに参加した塚田典子氏のREHACARE報告レポートを紹介します。

塚田 典子 氏

(日本大学商学部 特任教授/保健福祉広報協会 理事)



(9月17日～20日 4日間)

2025年9月17日、ドイツのメッセ・デュッセルドルフで開催された、REHACARE(ドイツ国際リハビリテーション・福祉・介護機器展:以下、REHACARE)の第1日目に参加した。REHACAREは、世界最大級の福祉機器の展示会で、1977年にドイツ国内に約100あったセルフ・ヘルプ・グループ(self-help groups)によってスタートした歴史を持つ。

今回は、REHACAREディレクターのMr.Niemann(ニーマン)氏との会合の内容やREHACAREの展示会場の様子を紹介する。

## REHACAREディレクター Mr. Niemann氏との会合

今年の出展社数は、例年通りの約40カ国、出展社数は約800社であった。88カ国から34,000人を超える来場者が訪れた。過去最多の出展社数があったのは、2018年の約1,000社で5万人の参加者数であった。出展社数の内訳は、BtoB(企業向け)が約60%、BtoC(一般向け)が約40%で、この比率はあまり変わっていない。

ただし、BtoBは主に世界からの企業が多くを占めるが、BtoCは主に地域の障害者や障害のある人を介護・支援する人たちが多くということであった。1981年頃はまだ営利目的の企業の参加が多く、また政治的な色彩が濃かったが、近年では、産業界の意識も変わってきており、「どういう介護用具があると役立つか」や「リハビリにはどのようなものが必要か」というように障害のある人のため、社会のため、という具体的な目的に変わってきており、「自分の家族が使えるものを生産する」という方向へ動いて来ているという。また、企業のスタートアップを政府が支援したり、若いイノベーターの養成に政府が補助金を出したりしているとのことであった。

さて、今年のREHACAREのテーマは、“Mobilization”(自分で動く、自分でA～Bへ移動するの意)。車いすを製造する企業等はいまでもなく、障害者の家族や支援グループ、地方自治体の支援グループなども参加している。

また、昨今の傾向としては、ロボティクスや3Dプリンターを用いた技術、さらには人工知能(AI)を用いた技術の展示が多くなった。車いすでも、眼鏡を使って操作するなど、最新技術を取り入れた福祉機器の展示品が多くなっている。さらに、まだ認可されていないが、自動運転技術の展示やスタートアップ会社の新技術に関する出展も増加してきている。

なお、将来介護人材が不足することは分かっているが、ドイツはICT技術の発展はゆるやかな傾向がある。

そこで、REHACAREがやっているのは、若い学生を集めて「AIがあるよ」と将来の介護職に就く人(学生)を呼び込む取り組みをしているとのことだった。具体的には、学校でツアーを組んでREHACAREに招待し、展示品を見てもらう機会を設ける。以前、展示企業側は、若い学生は消費行動につながらないので、学生が展示会に参加することに対してあまり良い印象を持っていなかったが、この人材不足の時代、今では若い学生の参加を歓迎しているとのことだった。



Mr.Niemann氏(中央)を囲んで

## 会場内の様子

会場内は、老若男女が参加し大盛況であった。特筆すべきは、学生と思われる若い来場者が多いのが印象的であった。Mr.Niemann氏が、「次世代の若人を招待してまずは体験してもらう」と話していたとおり、若者の歓声が多く聞かれた。伝統的な福祉機器もあるが、時代を反映して3Dプリンター、ロボティクス、AI等の最新技術を取り入れた展示品が加わっていた。



大盛況の会場



生活を支える福祉機器の展示

## 日本企業の出展

視察チームが最初に立ち寄ったのは、REHACAREのプロジェクト・マネジャーで日本駐在のMr.Rabe(ラーベ)氏から紹介された、「Tokyo SME SUPPORT CENTER」の展示ブースであった。「Tokyo SME SUPPORT CENTER」は、公益財団法人東京都中小企業振興公社のことで、展示ブースを開いていた。同公社の「Tokyo SME SUPPORT CENTER」のレポート(2025年)によると、都内の中小企業5社の出展があったと報告されている。

その5社とは、介護時の腰への負荷軽減を目的とした(株)イノフィスのマッスルスーツ、(株)インテックの視覚障がい者用音声腕時計、看護師・介護士を中心に人気を集める(株)コスモテックの腕につけるウェアラブルメモ「wemo」、MedVigilance(株)の心電図を計

測できる最新バージョンのスマートリング「Fy-Ring」、(株)オリィ研究所の分身ロボットOriHimeであった。

また、島根県の株式会社加地は自社単独で出展しており、EXGEL(エクスジェル)という低反発でも高反発でもない「体圧“流動”分散」の新しい第3の素材を展示していた。



Tokyo SME SUPPORT CENTERのブース

## 印象に残った展示機器

最後に会場内を視察した際に印象に残った展示品を2つ紹介したい。1つ目は、3Dプリンターで、患者の手に合わせた装具を製作するオランダの会社、Manometricである。スキャンの機器は、主に病院に設置され(無料)、医師の診断書に基づいて装具が製作される。データは世界のどこにいても、Manometricに送られ、データに基づいて装具を2週間程度で製作するということであった。スキャンの機器さえあれば、世界のどこにいても装具が製作できる。



手のデータを読み取るスキャン機器

2つ目は、munevo DRIVEというドイツの会社の展示である。この会社は、手が不自由な車いす利用者のためのスマートグラス(smart glasses)を製作し、このスマートグラスをかけ、少し頭を動かすだけで、電動車いすの操作が可能になるというものである。このスマートグラスは、屋内でも屋外でも使用可能で、安全で暗号化されたBluetooth(ワイヤレス)に接続され、利用者が安全に使用することができる。

また、利用者自身の頭の動きに合わせることができ、動きの再調整にも僅か20秒で対応できるようになっている。このように、スマートグラスを装着することによって、利用者は、より自由で自立した生活を送ることができるようになるのである。



munevo DRIVEの展示ブース



電動車いすが操作できるスマートグラス(眼鏡)

<https://www.rehacare.de/vis/v1/de/exhprofiles/7kBPFmvpQIayPNQe8vROZA>より引用

※スタディツアー全体の報告レポートは、3月下旬発行の「H.C.R. 2025国際シンポジウム報告冊子」に全文掲載いたします。

冊子ご購入申し込みはこちら⇒

